



脇差 銘 水府住市毛徳鄰謹鍛之／
文政十二年二月日（個人蔵）



鬼鍾馗図鐔 銘 水戸住通寿作
（刀剣博物館蔵）

目 次

①展示紹介

特別展Ⅱ 「鋼 と色金—茨城の刀剣と刀装—」
はがね いろがね

②収蔵史料（資料）紹介

歴史資料課 「水戸家中高橋家清賀子家文書「蕃痧病の手当并治方」」
ばんさびょう
行政資料課 「鹿島灘沿岸地域総合開発の構想（試案）－具体化された最初の構想－」

③トピックス

令和2年度下半期の歴史館

展示紹介

特別展Ⅱ 鋼と色金―茨城の刀剣と刀装―

令和3年2月20日（土）～4月11日（日）

【展示概要】

「鋼」とは、鉄と炭素を含む合金です。その語源は「刃金」にあるといわれ、文字どおり刃物の原材料として古くから利用されてきました。日本刀も、この鋼から制作される刀剣です。

いっぽう「色金」とは、赤銅（銅と金の合金）や四分一（銀と銅と金の合金）、真鍮などの多種の合金の総称です。これらの色金は、金属でありながら、深い黒色や灰白色、黄土色、朱色などの多彩な色合いを呈します。中世以降、特に日本刀の外装＝刀装の分野において、色金の利用が活発化したことで、日本の金属工芸における色彩表現の幅は大きく拡張されていきました。江戸時代に至ると、刀装は単なる武装というだけでなく、身につける者の思想や美意識の表現ツールとしての性格が強く表われるようになりました。

本展では、茨城県内で制作された刀剣・刀装・刀装具の優品を一堂に集めて展示するとともに、郷土の刀剣文化を物語る史料や作品も合わせて紹介します。刀剣と刀装に内在する歴史に思いをはせながら、千変万化の鋼と多種多彩な色金が織りなす美の世界をご堪能ください。



紅葉図鐔 銘 与五良作（個人蔵）



太刀 銘（葵くずし紋）【部分】（個人蔵）

序 カミと刀剣

古来、日本では刀剣に神秘的な力が宿ると考えられてきました。序では、茨城県内で社寺に納められた刀剣の中で最も古く、また、現存する日本最大の古代刀である「直刀」（国宝、鹿島神宮蔵〈当館寄託〉、下図）を展示し、信仰と刀剣の関係について考えます。



第1部 刀剣

ここでは、主に室町時代から江戸時代にかけて、現在の茨城県域内で制作された刀剣を展示します。

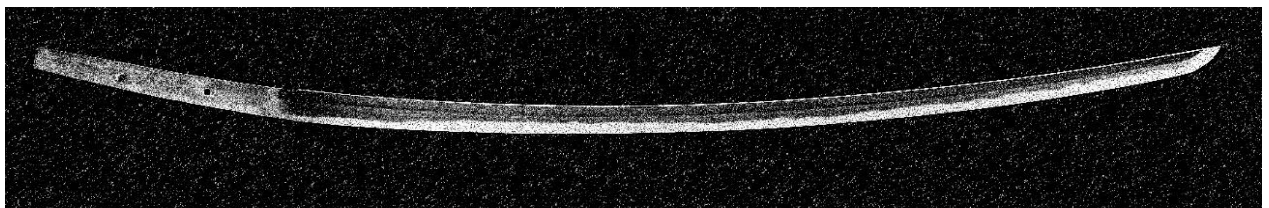
「第1章 茨城の古刀期」では、室町時代に東条庄（現稲敷市）で活動した刀工たちの作品と同地に伝来した古文書から、茨城への鍛刀技術の伝播経路や、刀工集団と領主たちとの関係性を探ります。

「第2章 茨城の新刀・新々刀期」では、まず、江戸時代前期～中期に水戸藩2代藩主・徳川光圀の庇護のもとで活動した刀工たちの作品を紹介します。その後、江戸時代後期～幕末にかけて、水戸藩、笠間藩、志筑藩、土浦藩、古河藩の影響下で制作された刀剣を展示し、幕藩体制が刀剣の生産に及ぼした影響を考えます。本章では特に水戸藩領域内で制作された刀剣を中心に展示します。当時の水戸藩は、「水戸刀」というジャンル名が成立するほどに、全国でも有数の刀剣生産地であり、多くの優秀な刀工が活躍していました。彼らは、江戸や大坂などの刀剣生産の中心地から技術を取り入れながら、藩主・藩士らの求めに応じて、武器としての性能と美しさを両立した日本刀の制作に励みました。水戸刀は一時期、実用一辺倒の武用刀として認知されていましたが、現在では美術的な観点からの再評価が進んでいます。



脇差 銘 水府住市毛徳鄰謹鍛之／文政十二年二月日

また、本章では、「太刀 銘 則包作」（国指定重要文化財、水戸東照宮所蔵〈当館寄託〉、下図）や「太刀 銘 備前国友成」（東京国立博物館蔵）などの、水戸徳川家が神社や皇室に奉納・献上した古名刀も展示します。



第2部 刀装

第2部では、鐔などの日本刀の外装部品である「刀装具」を中心に展示します。武家の身分的象徴であった日本刀を飾る刀装具には、当時の金属工芸技術の粋が凝らされました。特に江戸時代中期以降に水戸藩で制作された刀装具は「水戸彫」と呼ばれており、当地の金工らは、水戸刀の作者たちと同じく、全国でも有数の生産量と、高い技術力を誇りました。水戸彫作品はテーマの多彩さと精密な彫金技術の特徴としており、当地に育まれた技は近代における金工界の発展にも大きく貢献しました。わずか数センチの小さな画面に彫り込まれた花鳥風月や古典の一場面から、江戸時代の人びとが求めた「美しさ」や「格好良さ」を感じ取っていただく場になればと思います。また、大規模かつ高度な技術をもった金工集団が郷土で活躍していたことを広くお伝えできれば幸いです。



鬼鍾馗図鐔 銘 水府住通寿作 (刀剣美術館蔵)



獅子牡丹図大小揃金具 目貫銘 萩谷・勝平 小柄筭銘 生涼軒勝平 (花押) 縁頭銘 水府住鍵谷勝平 (花押)

【部分】(個人蔵)

結 維新を超えて

明治時代に入ると、散髪脱刀令や廃刀令の公布を受けて、刀剣と刀装の需用は縮小し、多くの刀工・装剣金工師たちが、野鍛冶などへの転職や廃業を余儀なくされました。しかし、刀剣・刀装具制作の技術は、潰えることなく現代まで受け継がれています。この伝統技術の継承の裏には、「御番鍛冶」の一人に選ばれた水戸刀工・勝村正勝や、近代金工界をリードした名工・海野勝珉など、茨城出身の刀工・金工の貢献がありました。本展の結びとして、近代における茨城の刀工・金工の活躍を紹介します。



丹鳳朝陽図花瓶 銘 帝室技芸員 海野勝珉謹鑄

(刻印・純銀) 長寿齋 (宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

収蔵史料紹介

水戸家中高橋清賀子家文書「蕃痧病の手当并治方」（歴史資料課）

「蕃痧病（ばんさびょう）」（「暴瀉病（ぼうしゃびょう）」ともいわれました）とは、感染症の一つ「コレラ」をさす言葉です。幕末には大流行となりました。

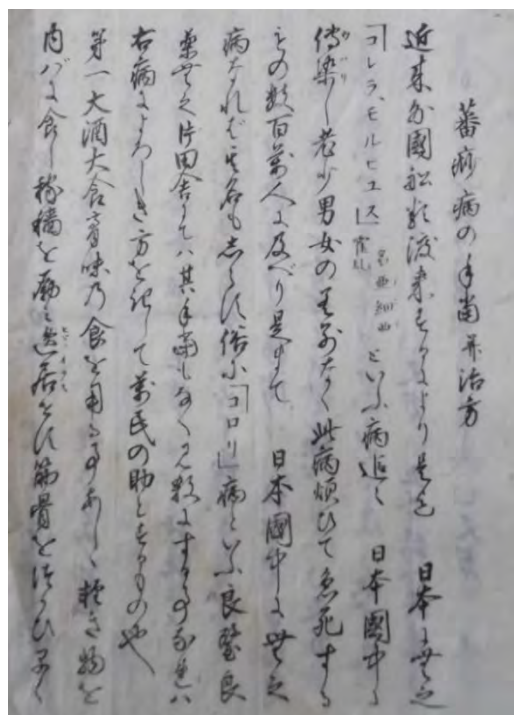
安政5年（1858）春に長崎から始まった流行は、夏には江戸にまで広がりました。水戸藩士小宮山南梁の日記（「南梁年録 26」『茨城県史料 幕末編Ⅱ』）の記事には、8月の江戸の諸寺院からの報告によると、死者12,028人とあります。9月10日には水戸では5、6人だが、江戸では12万人の死者が出ているそうだ、とも記しています。この時期、江戸では火葬場がある千住・小塚原には、火葬に間に合わず遺体が放置され、その臭いが下谷・

浅草まで漂っているという事態となっていました（『幕末御触書集成 5』）。

こうした状況に対し、幕府は8月下旬に予防策等をまとめ、各藩に通達しました。水戸藩でも徳川斉昭の草案をもとに、弘道館内に設置された医学館が、独自に予防と治療薬についてまとめた冊子を作成し、領内に頒布をしています。今回紹介する史料は旧水戸藩士の家に伝来したもので、印刷した2枚の用紙を2つ折りにして綴っており、末尾には「水府医学館」とあります（高橋清賀子家文書 No. 463）。

最初の部分（写真）にはつぎのようにあります。

「近来外国船類渡来するにより、是迄日本に無之「コレラ、モルヒユス」（一名亜細亜霍乱）といふ病、追々日本国中に伝染し、老少男女の差別なく此病煩ひて急死するもの、数百万人に及べり、是まで



日本国中に無之病なれば其名もしらす俗にコロリ病といふ。良医、良薬無之片田舎にては、其手当もなく見殺にする事なれば、右病によろしき方を記して万民の助とするものなり。」

そして予防策として「第一大酒・大食・膏味の用る事あしく、軽き物をば内に食し稼穡を励み逸居せず、筋骨をつかひ、早く食物のこなるる様に心懸べし。（第一に大酒や大食い、脂分の多いものを避け、軽いものを食し、仕事に励み気楽に暮らすようなことをせず、体を使って、早く食物が消化するようにする）」と述べ、冷水と酢と砂糖を混ぜたものを毎朝服用することを勧め（なお、幕府からの通達には、これに「体を冷やさないこと」が付け加えられています）、続いて治療薬などが列記されています（同史料は「南梁年録 37」『茨城県史料 幕末編Ⅱ』にも収録）。

当時の水戸藩は、日米修好通商条約調印をめぐって斉昭や慶篤が処分されたことに端を発する混乱が始まった時期でしたが、いっぽうではこうした未知の伝染病に対する戦いも行われていたのです。

（歴史資料課 永井 博）

収蔵史料（鹿島開発関係 行政資料）紹介

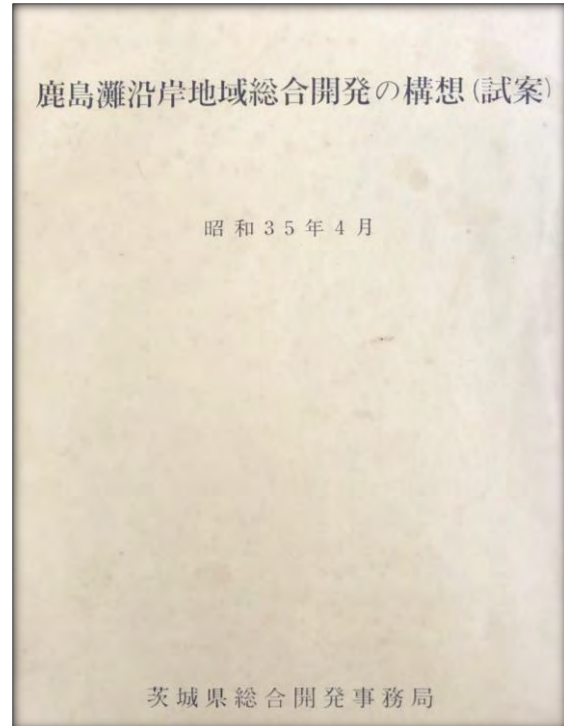
「鹿島灘沿岸地域総合開発の構想(試案) —具体化された最初の構想—」

当館では、鹿島開発関係の行政文書や行政刊行物等を、歴史資料として保存・公開しております。その中から今回は、茨城県総合開発事務局が昭和 35 年 4 月に作成した行政刊行物、「鹿島灘沿岸地域総合開発の構想(試案)」(以下「構想試案」とする)を紹介します。

1 県の開発組織改編

茨城県総合開発事務局は、当時、県の開発行政を担当していた組織です。昭和 36 年 5 月には、鹿行開発推進事務局が鹿行地域開発の専任部門として分離独立しました。その後、県としてより強力な開発推進体制が必要となり、昭和 38 年 11 月に企画開発部が設置されます。この企画開発部には、それまでの鹿行開発推進事務局に代わり、鹿島開発第一課・第二課が置かれました。

昭和 34 年 4 月に当選した岩上二郎知事は、「後進県からの脱却」を念頭に、就任後直ちに鹿島開発の準備に着手しますが、この数年間の急激な組織改編からも、当時の県政における鹿島開発の重要性が伝わってきます。



構想試案 表紙

2 構想試案の概略

(1) 開発の必要性

構想試案の冒頭では、「豊富な水と広大な土地が茨城開発のもとであり、これらをどう結びつけ、活用していくかが、後進県茨城の開発に極めて重要な基本的命題」、「県内で最も後進性が強いといわれる鹿島灘沿岸地域をみるに、開発可能性が最も大である。」と示され、鹿島地域における開発の必要性を説いています。

(2) 開発構想の大綱

構想試案の「開発構想の大綱」には以下の 5 点が示されました。

- 1 鹿島灘沿岸と東京湾を直結する高速道路の建設
- 2 約 4,000ha の工業用地を確保し、25 の工業団地を建設する。
- 3 工業地帯を形成する住宅用地や公園緑地として、約 9,000ha を確保
- 4 新規増加人口 80 万人を想定
- 5 土地条件を改善整備し、集約的な都市近郊農業を確立する。

(3) 事業費

構想実現の経費については、工業用地造成費、高速道路・幹線道路建設費、工業用水道事業費などの「直接関連施設費」として 499 億円、鉄道、上下水道事業費、送電施設費などの「間接関連施設費」として 335 億円、計 834 億円を見込み、直接関連施設費については全て進出企業の負担としました。

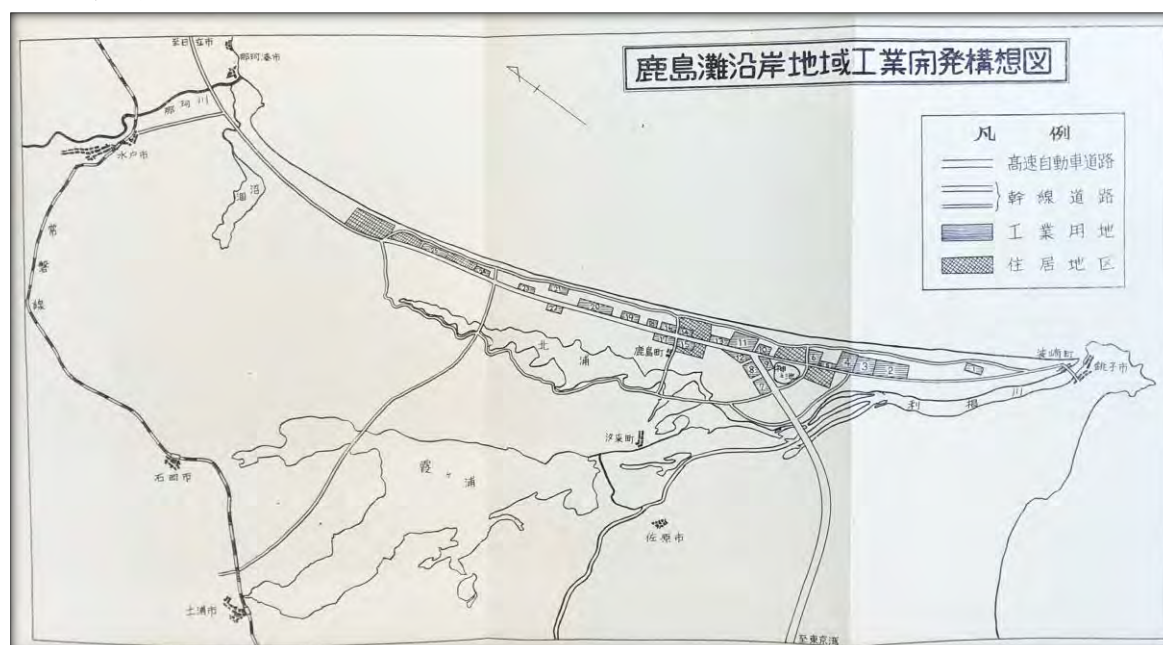
(4) 開発の効果

この構想が実現した場合の開発の効果について以下のとおり示しています。

- ・農業については、園芸作物と畜産を主体とした都市近郊農業に移行し、農業従事者一人当たり生産額が 88,000 円から 196,000 円程度になる。工業化都市化に伴って農外収入が大幅に見込まれる。
- ・工業生産については、年間生産額は 6,000 億円を超える。

など

3 港灣建設計画は？



構想試案卷末「鹿島灘沿岸地域工業開発構想図」

鹿島開発は、堀込式の港湾建設を中心とした開発が特徴ですが、構想試案は本格的な港湾建設の調査研究前のもので、構想試案巻末の鹿島灘沿岸地域工業開発構想図（上写真）には、港灣が示されておりません。

この背景には、昭和 34 年 7 月に産業計画会議(当時の私設研究調査機関)が発表した「東京湾埋立て計画」(ネオ東京プラン)があります。昭和 34 年 9 月、岩上知事は茨城県出身の財界人を招き、工業開発や観光開発に関する助言を得るために県内の視察を行いました。その中に産業計画会議の一員がおり、ネオ東京プランと結びつけた鹿島地域の開発を考えます。具体的には、「東京湾と鹿島を高速道路で直結し、広い土地と大量の水を必要とする企業を中心に東京湾の奥座敷という形で鹿島灘沿岸を開発する」という発想です。岩上知事も、昭和 36 年 3 月の県議会において、「東京湾の後背地としての開発が当初の考え方であった。」と述べています。

港湾建設については、昭和 35 年 8 月に岩上知事が運輸省に対し港湾建設の調査研究を打診します。以降、県と国で試行錯誤を繰り返しながら調査研究を行い、港湾を核とした計画を練り上げ、おおよそ最終案として作られたのが、「鹿島臨海工業地帯造成計画書」(マスタープラン改訂版 昭和 37 年 12 月)です。

その後、鹿島港を中心とした鹿島臨海工業地帯の発展とともに都市化や工業化が大きく進みます。旧鹿島町・旧神栖町・旧波崎町の鉱工業製造品出荷額(3町合計額)について昭和 35 年と平成 6 年を比較すると、約 900 倍もの伸びを示しています(県全体の伸びは約 50 倍)。また、農業についても、開発とともにビニールハウス栽培など当時における近代的農業が始まり、現在、神栖市は日本一のピーマンの産地となっております。

☆ ☆ ☆

前述のとおり、構想試案は、港湾建設計画が盛り込まれておらず、内容も概略的なものではありませんでしたが、開発模索の過程で「鹿島地域の開発を初めて具体化した構想」として貴重なものです。当館閲覧室にて、この構想試案をはじめ、その他公開中の鹿島開発関係の行政文書・行政刊行物も実際に手に取ってご利用いただけます。当館HPの「収蔵文献検索」にて検索の上、気軽にご来室いただければ幸いです。(現在、閲覧室利用については、新型コロナウイルス感染症対策のため事前予約制となっております。詳しくは当館HPをご覧ください。)

史料学芸部行政資料課 小倉 朗

トピックス

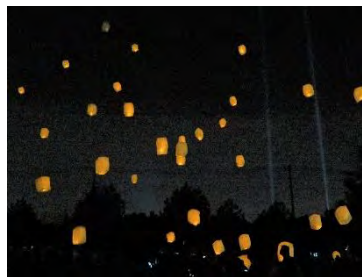
令和2年度下半期の歴史館

【歴史館いちょうまつり】いちょう並木ライトアップ他 11月1日（日）から15日（日）

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、昨年度より規模を縮小し、夜のイベントを中心に実施しました。7日（土）と8日（日）には、毎年恒例となっているプロジェクションマッピングのほか、旧水海道小学校脇の敷地にて、初めての実施となるスカイランタンフェスティバルを行いました。庭園では、近隣小学校の協力を得て作成したキャンドルの展示のほか、軽トラガーデンと称して茨城県造園技能士会の皆様より出展いただき、美しい夜の庭園となりました。

また、7日（土）、8日（日）、13日（金）の夜には、ナイトミュージアムと称して夜間（17時～20時）にも開館しました。特に13日（金）の夜間には、749名の来館者があり、普段あまり利用のない子育て世代や若年層の方々の姿も多く見られ、当館の展示を様々な世代の方々に観ていただく機会となりました。

お天気にも恵まれ、いちょう並木の黄葉は、7日（土）から15日（日）のライトアップした夜間の時間だけでなく、日中にも大勢の方が来場し、秋の歴史館を十分に楽しんでいただけた様子でした。黄葉したいちょう並木の様子は、NHK 水戸放送局やテレビ東京等でも放映され、各新聞社やラジオ等でも多く取り上げていただきました。



【歴史館コンサート】 11月22日（日）

旧水海道小学校本館にある日本最古のスタインウェイ & サンズ社製のピアノの音色を楽しむコンサートを開催しました。

今年度は、東京音楽大学をご卒業後、茨城県新人演奏会奨励賞を受賞され、各地で演奏会に参加されている塚田理果さんをお迎えし、バッハやショパンの曲などを演奏していただきました。鑑賞した方々からは、「コロナ禍の中で美しい音色に気持ちが癒やされた」、「明るい気持ちになれた」などの感想を多数いただきました。



【一橋徳川家記念室】一橋徳川家の名品Ⅱ

10月20日（火）から11月23日（月・祝）15日（日）

国の重要文化財に指定されたことを記念して、一橋徳川家の名品の数々を名品Ⅰ～Ⅳと題して4期にわたり展示しています。

今回の名品Ⅱでは、三世斉敦（なりあつ）から八世昌丸（まさまる）までの資料、「布袋図」や「黒漆百馬図蒔絵螺鈿金貝印籠（くろうるしひやくばずまきえらでんかながいいんろう）」など、若き当主たちに関わる史料28点を紹介しました。

NHK 水戸放送局の取材を受け、インタビューやクイズ形式で展示の様子が放映されました。



【出前講座】勾玉づくり体験 12月19日（土）

行方市立北浦公民館で、地域住民の方を対象とした出前講座「勾玉づくり体験」を実施しました。

縄文時代の頃、獣の牙（きば）に穴をあけて作り、それ以降古墳時代にかけて古代の人々が石で作ри、お守りとして身に付けるようになってきた勾玉について職員が解説し、その後、蠟石（ろうせき）という少し柔らかく加工しやすい石を材料に作業を開始しました。

参加した高齢の方は、「妻にプレゼントするハート型の勾玉を作りたい」「若者より格好いいものというよりは、年相応の趣きのあるものを作りたい」という思いで熱心に制作に励んでいました。

また、「私は勾玉の流線形や立体感にこだわりたい」と縦横3.5cm・厚さ1cm余りの石を、小さな玉のような形になるまで丁寧に磨いている方もいました。祖母と参加していた児童は、終始夢中になって形づくりに取り組み、仕上げ用のサンドペーパーで磨き上げるとほっとした表情になり、蛍光ペンの色を選んで最後の色付けを終え、笑顔を見せていました。参加者は皆、「良い思い出ができた。」と喜んでいました。



県立歴史館の出前講座は、小・中学校及び高等学校の児童・生徒を対象にした学習支援事業の他に、このように郷土学習支援事業として「勾玉づくり体験」や「中世くずし字解説講座」、「古地図の読み方」、「日本刀のイロハ」などの15講座を開設し、公民館等への講師派遣を行っています。どうぞ是非ご活用ください。

茨城県立歴史館 教育普及課 電話 029-225-4425

各行事などについてのお問い合わせは、電話、またはホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。